





俠客傳第二集 異評

己巳十一月
同人本集
序言
朱光評

特
門
號
卷

600
92



伏虎傳文二集墨評

水十一

失ふるもあつて館かへりしむらのゆ
ふちをせつて不知處のちよ山里越てそとあら
いよみくわがれむれどその山峰のまき又わゆう
は一人ゆゑとまめあひてまづ山中也筋からてくちも
おきくわがれむれどその山峰のまき又わゆう
む室、眼もとて耳もきもがくらうそりをあや
さうふる人ゆゑとまづくとあくまで力あ
てへかまくらがまえあきとねじか



か六の日西歿、即ちその日が命日の事より
ひめはまうてこの御子をあつすむ。又方
とも葉わふを小六の父の歿をうたふ。又
日西歿の著述、恩をうけむ思つ。友白を
刺殺さんのかつておもひよひはれす
めじ自正歿のわざをあせりとみせじて
左記の文前そも今とておひいきす
かくき。本自持ふがもじてすうじ
七前あきと併し感心す

賽の河原の幽靈すきりとえ合せぬそ

うちや日正歿、疑一ハルシミと陽氣自然と
月は齋、榮乃の初生と自然、わたくまの
さまにて貴君あくと感ふ

月は齋、月はさんとあを小六、薄心して、
されど月は齋あくと、毎内あれど、精神の場所
三の不便をとりて、月はせねあらね

うれきとわらふにうれ

時代のれせあと、非常のとあつて、前からま
きて、和あを日西歿うちの強きことよ

眞善めし

葛原あや子ヤカラ先生シムラ又大和和琴の奇岐
たと敵手アキシの拂ハスたるもハタハタに此處
は處カタマリのまゝもハタハタて、敵手アキシの拂ハスて
あけらハタハタをゆき草ハタハタて水游スイギュウの底トトロ
等カタマリ考ハタハタ極ハタハタにハタハタて、そのう
やハタハタての御ハタハタのうすこ風ハタハタ敵ハタハタの情ハタハタを
こえさうかく後ハタハタは前ハタハタかは見よて、
ゆのう考ハタハタ考ハタハタ拂ハスて、こらへばかのと
うして、と考ハタハタ先ハタハタの勧善懲惡ハタハタ

月夜露りてはるに霜を小六がまにて簇瑞スミヨシてゐる
物あとがあつたうその瑞瑞の山れふかよえき
ゆきはるいはれのそよぎのまじふ
まきはるいはれのそよぎのまじふ
ち猿のはり焼立ちひを用ひうゑまぬしき
ゆきはるいはれのそよぎのまじふ
対金キニサゆゑふ名、寒草もむかひうゑまの
うゑまのうゑまのうゑまのうゑまの
酒室の席にてすき一夜轡スルのとを少人よみか
ち後を承スルまよひく真せまわづの物語

敵役ども一はやみのあまうねうふかわらう
敵手の場の論はをなきの評用のまぐ
いと馬か

このお縁ハ初備金川の臣にて義法並に窮
の物語の堅忍さと、ことより一軍のわざ
ちうを始み、義理方のことをありべつてかたが
の主をのみづぶれて二ツを一つすれへむすび
おつゝと自由自在のめぐみておうとうそく
りちこせてされまう清子力めくかし
このきうちうきうがきのむすりめくの事

ちきま事自れのよもよもあきこじるが
夜ノ敵討を立ち身立たずト底々傷を
き同。少かまかざる^{内編}照てあひてきくは
れ

一、西才ふうねきゆ、確獨とくすす十五下ウ底々
の陽あつきふタキモ傳しぬえ處
同ナハウ安同ヤヤト均しつきう安同カトうち
かひてとのえみが
内十九ウ水火既清の教つきてもうとまく
うまでのえみが

第十二回

小六とお同の志の猿をどうかすへとまわるがまう
まわはりそちもく助先キテモトムヘルをこう
さうれど仰の涼風の扇山にあらわハ前後共に
あれど西同の氣をの詰湯あとハマアていてぞ
あきらめぬまうすさうをかたわせようて前
じる年考徳川あつそこであすかうてこまセ
あらわを處する

一、サニオ大繁繁利手刻まとひだり室をま
まかまうとくと仰の文達

小六の歎を嘆くうへやうをあらわいまへの
うちやさんとことわれまやまゆーに小六と
嘗勸善徹惡の心をもとまへし。まうりま
さづくいそひぬ

かたうらまく歎ハ也同。そニモ先故、よきがません
家臣をばこう。また又毎日さくづつはん草の
文字の絵かみて首を捕らせらるむのふかく
ヨリ年一丈までの絵が主役である。その前に
きてかへり心を嘗めんとふかくそのまへにて
先考も是元五家臣とこ盡をまつせその次のまへ

あらのまうら脇をまよひて其傷のめりたりかうがま
すくさゆもかく全備の文面ひとまし
小六の日は節をめつや。みる程行き、用つとま
宮もあらかまう言ひて日は節によをおりやあ
そままで行て、ふやうふとひ首殺をさせらやま
あわじ又日は節を後向のおもして、小六の日
うらやとりあがむて行ひて、本自らのまくと
いと感づく

月は朧々懐悔悔にあらもとある初のまはは言
はくまうちせーのみとあらんははをうがうてか

まのをうがるものと取れどもそれの徒あり、
ちうてう般まよ衣の因手のゆくまーのまれてと
あまりと情すうまく人情とうふくもや
け月は朧々まくらぬもありえあれ徒あり、いて
ありてういともの作り、多浪をうらうねら
まくまくこの房房のあらうと、若狭こわびのゆ
老年のあらうせまくまく、又一景一思をみて
月は朧々所後筋を傷心の主席よくわねり、
百は却うたへ、もあらりまくわらふほどのうれ
とふかえのうらとあ事不全とて大死がいふく

りとく

青友ハ三日は節の季流ハ年にして候して坐ま
あらわす所を大に於ておも流にて御内
居するを勿要ありて處する事すりあつて
日は節と云ふ事すりあつておも流ハと後流の場
うちキホ本自らのうそあて翁翁もちきりがる
先せの序ちよとおも流の草を除つておも
流

オナリ

庶ちの母がおきておも流をりあへ是も
やう序けとくの時よりおも流の事自らわざる

さく入鹿去り母を脇毛殿の家にの寄せりやう
まゝの遊かくふをあひて一便縁かくあつて伴
寄りすりまづこうとまつともいとく
かおう生返りをめかくまゆの用意の裏事の
辛氣がありとおも流の事自らのうそあ
ふれひそねる爲めちう小六の衣類ハままで無
まれてモテテ生返りを候うとそこをも
うせみの生をつりむるも仰のやううへ
鹿去りとおも流にて二日つづくをもあ
役として人形ふ駆あらがし人物をへわわの

貴有ふつうひねてへわざまくらうねよすて
御事あはれに無を思つて

ニニセオハムリ萬りやううとゆめんあえ

感つて

安ら主従り務兵の行へ捨使ちて不妄言語の
いき物元となりて、モトアシテ安國主従り永
保モト行氣をのぞれ、ノロはくじあ勲も徳
焉の意也

若宮、安國主従り務兵の行へ不妄言語の
特産を重ねる事す、もてゆくおほの事若宮が

ほし義つゝもりとすかく、庶食の用ありて
首をそらして、初従由井の行へ四角すてはる
かくて目口節あふぬくとまかうて自の自言一時
ちみうて風きつりぬふまで助則よもぎてハ教る
あきを形を助則とす、うりあうと目口節、
似つうきくねすとあとのく経作の済ううきを
若宮、利、封、小ち、盡、とよもあおとむるひ
ううきほんうう、清きのひうう、辱のひう
りきも

遊行寺、本多、近、内従の思意にそむくもふ

若情うふをひきとて盡うれるむべしめじ
うちこへあひのうめり盡うれるむべしめじ
万姓の爲の爲めに義礼智信に五常のたる若情
くも興へますの偏れはる性にてる故に文
行若情やそれの盡うるも若情う生りてあ人の
石此の多うりてニテ若情うもをなむと一の
つあるじ有盡うれゆるはぬめしめ(又
往行ふ所とく處れどをさまわ)ニハ内習方便
とハ義者といふ人也ノトニハ内習方便
キイ例うねばあふかに清官矣めんとお

みりえての言ひとよべく事実よりぞ
後、大日寺と云ふとあんと石研の文字を仁舟、
しきぢうへまことの一段のちうて若情、
尽心よくとあざまがお父の偏の思ひもくう
してはまく、若情うもりとて若情
盡うせうやうへあふか

底尽うにとて若情の場とてあひう育ふの
よこまんにとて

才十四

三浦助時うう傳念ううておう安同う傳ゆう

うへて没後せうま新又傳へたまひ
そとく御先傳事の主はか一

安國の男をさうむ人わざことハ安らゆるので
とあきかうこれハ少ニ市、もと本有也、
じきかうこくておほし歎きもさり又長編保
、亀のと安國、あはじてかつてかくてゆ
小六、衣裳、血のつまることよじりそそぎて
かきあひて至極のにそそぎあひてゆる
も言葉をうり苦心のうよ笑ふとあすみ
三、うかがひわうの義つまうて平生若きを

ちあふまよいとあくびかえらつてくと
うかがひの承

産小六、間やちとさよとふと、東小六とあ
とああきひわうま、生傳安傳名義の
ちあくびかえ

テナハオらひまくわうおなみて、おおんのうう
ううおと、おもと、おもと、おもと、おもと、
うせりと

日日一ツ去せぬとまきひわうまくいとおもて
者あると新晴のせいあり

小六、後、系譜の後忽ちて終の幕すとやう
セ仙出門てかどよりの後天武大友の歎を
ひれて南北の商市をまよ拂再来とおもむる論
古人主義の論そいと傳へ一あてこかへて
セ仙、わらにそりす向ハキスのきみて御あや
さうの如く一再ニ再世然後感のゆき一ほ
すうきやあきら又うまたひくみかの
聲の佛事も情事の性あくしよけ
うあて姑蘇娘のことを一すうあくまのをあ
そ仰し侍身やすかせと感ひさうこの入句

そ考證といふの姑蘇娘ハつひ、わたと天寧も
とりせぬや

三種の仙舟のうちでハ却てつづれを抱く、
也用のことをあらわすのである

くして仰し申ふきうきの

唐去り呼吸あそびとやうつかひて音波、まこと
つぶさせられより無事とすなうえまのあくほ
ふく風のこ

十六十五曲

一三才多氣を一里
キミカ文句のあらへ
ガーリルおもて詞
せんが子多氣の
はくし

磨去うひきよみかねふかへりあそびて仙丹のうめわすれ
しるをみせまわうとて情うりあらものうをあらうさて
うつきてうの舟をのませ磨去うひきをふまうすほも
三、由ウ阿保ノ付。ガナアホトあり是ハあそびの
リハアホ。ホハ闇あきくも、うぢれ

小ちう至處ふ供て角とて至處の私、物候をき
りかして一便の物語をひきじまわるハ事自和
リテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ
中ふわ鳥聲の足利家の譜との端あうるわそ満
わ引の行、状守延行、状守いぢうさく後の臣が

にまもむかうふあふをさうふくますみやまひい
カカフ

守延、もすちの小六、義兄弟ある信夫ことよし、守
勢ふくそくわきぬくわきぬく、もてふせじかた、信夫の
貴きくも家ふきくも、ゆめむ、いもつゝく、ま
ああきをた、有能のまくいとやかくとかれ
ああああああああああああああああああああ
うき

信夫、とけりやう若まつわよふとわまく
あつねこのうつるうあいどもとせむじこ

あくまうおろすよと絶ゆの湯あつまき傍人のうちなで
そとおこりをせはせざまつあやめ室すもあら
ほひとてほゆしわこ

テ十六曲

老あつ若うへりあまきあはれおもぞれねね
まよふねでわがじこらハあくまてあやめ室す
おははは新すくじりて自や自やのゆゑと感ふ
のや相手

小六つま下の冠丸田の鶴をときて老樹の高竹
み一病せましゆくはまほりわくわく

シニナオ來すよされきよられぬやいとまく
みれきよれきよとよとよとよとよとよとよと
いるゆうわと感ふか

小六つせ堂あるやうにして大人の座談をとむ
庭こひ水躰の林教はんすち山神廟のほの集脇
擔骨うそろのほに信夫、信夫あらわすそいす
衙内をうらやまうすそいすそいすの心地にそて
あくまうよか

うやま人のわざとそらかての國司五訴の
時行舟うれはうよかみうすそいすそいす

さゆの佐あはす
集脇集穿(集脇
骨の端うらやま
うらやまうらやま)

まよてその竹林をわざはずいとうふきと
あとはと駆けの場うちきとは座あらやこううに
居候ふとれども山の自由自在のせむ又山猿のす
うと荒涼の人の廢墟といへるあつまつて
はと似つかふとあくわさうえます人あとはと
形く豪傑をひそむてそと六ふきくまをすと
自然のうららかめこゑじゆうきりうみを
くにかまくわざすとあく室井戸のまわいと
おとづく水戸の御廟の隣にいたのあくま
をりくまかとこひたのあくねうきのまと

あへんかとくちうとあく遊あみて山中廟かと
ろうふきわりとく
密書をよみよして小六、あらかとまほとよかと
教役をえいやかといふとひだりひだりくわ
うら一同の行列のあらわりをあくくくそくと
きぬうきく

オナセ

小六、うりの轎かふたじとをわくううせき日引
てうへや六、假家のちまかと竹林あみてひす
小ちまかとさやひかみて第一支まの轎を又役

あてられまじめり
小六元司のつめひきいとねうがく生浦を候
えもまふ本來まで駿馬の上使ひゆ候る

じゆく

信夫、総機をあはへよよりまくすう衛門の者
ありてはりて、郎がともかくもあらの
ほへわらひくかみせあく本因幡を一寸すらわ
りまが

ゆ、ナウおわれどもなまこむのう幻の
えとあふあきせきりてあらかこみて仙舟を役

かまてりむも唐ちうとうの里直にまく
少う信夫をまふ一院ハいと端屋の場にてまく
こひくへかまぬと仰。西吉自然みて
いきく利あかきとやうかかしゆくて處つて
お十八曲

四、ナウ小六元義脛家傳を考賛せまくこと
ひそむる又、候客傳の名詮をときだされて
泰勝の母親からおもむき引板を啟、内卷より
事一粒して泰勝の赤のゆゑあさりと有り、
えと仰うをまつて松内お記を亦人ふあすま

ちとや鶴内をも思ひきの草壁もあつまつて
はよるかくさ侍

かくさあらのま動めりと重うむにあらりと至利
の譯とし併あらん物には似つかへてかじ
至利の譯つまを付らわる「あらまの」
にとよきくいおふと勿偏あと「そぞきあらわ
あらはきのほれり」と謂ふからん物とかあら
あらあらか

あらの玉をかたる故破の既にとて「ニハ
賛ゆあらまくまきを付すにとまのありと
うねる」は馬のせり

セ九回

あれすとてかうり侍と名づけられ成るをひ
ての無傷、とあらかちておもてぬる又義父の
うつぶつとあらえり小六の前二ハナをみま物の
既とおはりとくか六字生義父のことわざれ

其の義をもつては、

少う御、丸一年、おもひをひやせりあへ信を
せん。さうはまくめもじゆく。前備馬入川の便ハ
実のれども、ほんつて義子の志アリも、とぞろ
實父の名をき、ひとさうへたるとあらじとておきまち
ぢいわたりあわまく、とけむの、一言あてともか
へふてそのがくの勘定をとめまく、いかうま
ての内あへれて、いもむく

このままで處去つてゐてもうすぐ本をもたらす
やせな木立のそばにあつてゐる

タマリ

奉行の役事あるるに御徳せんとあらゆるのねりあ
又著寅もんの内からあつたうそをわざる若宮の
すみれをせつて一升の面お折をすしておまえ
の照通までいきなす。 仕つかさをよむれど、
うとうと言ひあく。 以年の事務あらわせ候徳
あるの上あてて解けたり

五十九才のまことにあつたときより
まわらへとてのえりにひきうちめ

信あくち本を陸路をつうすへにまつてゆきとお

されにて將曹、便船をつせてやる。おもむいにさへ
おまよ難舟の端あらきを幸舟船のこもりてか
稲城の田園家をさうぞひてさて宿室をす
のことは事もハニスル。おもむくとおもひをつ
うわさめのれ

五ノ十二ウカモキアガ、事まよもう哀傷うきりあ、

り」とまで仰くぬ又處のやう

小六、たゞつみう半隻復をひいておもむく
前編の四三、いとくこの
半隻復のとくかて又後もあんと嘗めて

何から何まであそびのをもじ感つて

五ノ十五オももくも歩轉するゆきとより、身をせ
つきあさきてまで仰くぬ又處の

オサ四

岐麻子船のとよを先よき、ひよきあそびの祖先の
ことをつづけてその年の春ハ舊記と官様とありと
もう年々、かほる、春波をうきよしの浦用のまく

一感のこ

岐麻子船を陽る小舟夫歸がすくとするおひが備
館大六夫婦の小舟をすくとする船主そぞりと

五ノキオ正行墓を徃生院と奉る。四丁ウ、
正行墓後南あニテ前ちよとおもわれ。毎年
是と徃生院の墓ハ後人の供を薪屋村トあるもの
の墓ニシハ第ト多侍そり薪屋村ハ飯盛山城
の舊處で西奈館ものうえあれ。北門は
より徃生院、西奈館はあり。行
ふ事あるからうて寺ふあらじをかれね
又の廢寺をふりてかれらもあらじと
あと行なう。

四丁オ四丁ウニ所、建水分ミケと前タ

えれハ古き前ハミクリナリナリの由人ハスイ
ブ」とリアミクリトカスイブ」トモアシテ「
トス前ハアシテ「ねテ

四丁ウ本不見山モトミズトモアシハモトミズ
モトミズトモアシハモトミズトモアシハモトミズ
トモアシハモトミズトモアシハモトミズ
トモアシハモトミズトモアシハモトミズ
トモアシハモトミズトモアシハモトミズ

うぬ丸

四丁ウ楠木靈社トモアシトモアシハ南ホアリ
ウノ方木篇をト方うぬ丸

○

あれ清きをとて清跡をと
岐ノ原の御まほ手に南木靈社のまをとまわる
いもやくまへ生まゆか清けとめ人のせむ
ぬ竹あれ、あ竹つかまゆと下すゆ、いもや
金剛山の下をくわぐ久々しとくとく福ふと
あと沛たとくとくおとくとくとくとくとくとく
仙女が現の後ハトの山の空すとくとくとくとく
女仙ハ天帝の帝の令拂たりまつらを食せむ
あとて天帝の沛再来とくとく前みに拂まくと
まうて吹散し為出、まきてめじとみやわが

詩集卷之九

とくに小教をもって實あつて曾なまがまはいハニ偏
わ校のそとくに説す

聖朝の事記
序文　白玉朝の事記
はとつわるひあんみあちとくら確締爲
はかく傳音傳ハ是も日本文傳急作
玉て御の事あをせまく御傳急作
等つづかへる御急作とへる文書急作も實
ふく里はるきやうゆう、金玉あ文
りこれ御傳急作も實作も

もとよりのうへておもひたる事
そぞりいふよしむけんじてほしの事
清き事も見えぬ事の事の事の事
よしむけんじてほしの事の事の事の事
かあらひうすくも

桂齋

茅佑堂先生

便易傳四集

北洋

伏見の第四集

物評

あらわ
よしむら
ひがみ

三集の筒端は、この書あり。又けるも爲房
のま縁をめぐらす。初めの事ある。長寧館
に仰面す。また感賀の至

三十一回、高麗が木免、^{ハラフ}殺して生縄と摶へて、後
敵意のま縁を殺し、又馬と趙と石と擲て水
を試し、おまかれてゐる。能作と云ふ。されど
りの如

荷之郎が勝利を獲れと殺す。此、葛州魚郎也。

あの藤松純移
る前集解分
けとまつまつ
初々と軒裏
寝具の世の
看官の前か
えもあそ
もその意味で
くるかあまむ
なうが、秋翁
おれとそぞし
西翁とそぞし
も評みま
わざ

佳評

桜木にて又紫の枯枝にてちにてのえとすうへ紙梅
いあまと殺す。西報觀面の詫す。詫きては是を多
くいのの自評である。勘へば乞ひと云ひと云ふ
高ニ高する金銀を財とす。し剣へて腰とつる
あはれ。動きのむすびと云ふ。

佳評

曾根川も春が高き高き追捕とす。候。鴨

佳評

長跋が小夜ニ高きとす。ちやの五章とす。と2年と
年か。は。詞り。形勢流傳の情態のまあべし

五十撻電吹が根名伏はき解向う。王倫が根名伏
い離生堂のあい。ふほの赤岩一角。伏はき解向う
むかはり。していきありう。又めし

佳評

題目まくよ
眼をこめると
てすまく

おひら

おひら

是則作若
ひとの私包

佳評

荷二郎が長跋を以て根名伏はき解向う。又めし
奇ユア。て。もめし
おひら
おひら

笠穿數全
ひねまき
組一勇
傳のちよ
経事もす
ふの有宮
恩の巧挽をす
とまきこゑ

隆えも綱、面の縁像々、隆え六刀を斬りまつる
小隆成幼けりと、常坂のあらわし、画家の筆
詔みんらうさくらうさくらうさくらうさくらう
而の志毛、料り引きれいにまくまで月の
うめと風たまうまくべ又取立の御ハ逆アヌミ
西の得アヌミテ

毛詩曰婦有長吉
惟厲階
夏々渾君の
身をとむる
身をとむる
身をとむる

毛乃強強至るの候、薄る雲の富貴地云々又もを工
感心らず誠算す、傍らの高又敷草の己が隨ツリ
めめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめ

毛詩曰君子好勇
而無義則亂小人
好勇而無義則盜
まれりく

佳評

又萬葉と云々、而二品と土井のみく傳フニ及びて
翁一品が毛乃と云々、自多を序す、日ひくセ

あつまゆめ、もめ、そめ、

陸成が血まゝ仕立て、ハガの筋と計へヒシナキ
もらえモ慮の二富野又疎懶なげもづまくして富氣
を含々形及び隆成が絆、寄りあつて、手作を迄
るこゑもすて、誠情はとくめもめ、錦もくじる
の取例のもの、もくじる至めとす得
隆成がハガの筋と計へ、手作の所、富氣の今
もそく綴やうと、より附くめりて、錦もくじる

紳士の細集と仰ひゆるを 詳より筆と

及りて感心して

淮南子曰善游者溺善騎者墮各以其所好反自為福
隆光を含珠も盈々と八九の花内に曳き

と俱て引くも是を済むるに一は四駕其を涉度船ふ駕み事と駕くに至りて隆光と共に看者を疑ひ一船をあめの仰言として久仰あるを必死の歎を早く後づまく云ふ又甚キ

新章の趣向す

佳評

世の看官よ文をよみひきよらかのとよふともかく四表相合ふ
の又ももと其人をさうがめりと見て三條り別
てお説とえり列へて亦含意すす意か
めて立ての自己の仰言とあへれ仰ふる事
ありまじめ事にて感心熟讀のあみ

三十三〇 國書詔語主說の文字是もてあ
るを新考を而らへ縦横かとせちよが瘡瘻
の年々ハ家生年の事せらも簡端の寫生で
れど共に三集の序より悉く之をもてり詳
りて仰きゆるもの

東之集 五の巻の 神
志の文跡 はるかに 金持と称す
あふ物をもぞめぬ めぐめく 運
てもほのかひく まくらの事
又 まくらの事 まくらの事
例 まくらの事 まくらの事
ひきの因縁 ひきの因縁 及び ひきの因縫
捨てまくら まくらの事 まくらの事

雷九郎が氣持のよさを切と拿ひて

佳の又桂洋
此處所が四城と計る。勢威れ凜々と
看巧たりま
さう
文選曰智者之惠
慮於未形達者所し
視於未兆
されり、
軍て開戸をめ入や
さゆすナ
ぬけめやくめ

此處娘が夜付とさへ
出でゆるを記神連了
てちぬくにあらわす事
もあつて神機妙算と

文選曰策定禁中
功成師戰

辛

頃衣の年
も当り

家語曰與善人居如入芝蘭之室久而不聞其香即與之化矣

安次が主人を歓待するに嘗てめで
碑とあつて宿舎を付けて小供侍め。張清
が笠山十五郎とお向か形勢より想像して
目を落すゆゑを以て又極哀役つけて招致
せりと又接とう。奴僕を制するといふ
ゆゑあるをもつていふ。感心して
自仰せり。五事は往遊する所をすゝみを木訥
いへり。山といふぢやうていわす。又他の奴
佳評 僕が身の負の小城を縛らるるをうやうやしくぬ

隆えがれののんびり唐姫め況のまゝ五罰
を受ふたゞきのまゝのまゝ一罰とすまふと
かく

まづて隆えれ入の後と涅槃してそげゝ場
あつてよもや夢ひしきまゝべつとまやふ。詮
まゝのまゝこうは枝えめ工そ瓦作のまゝとみ
あづめぬゆめそと情くまゝうめ自在の
作意えく廻船

四人の生捕鳥洋服のうて白狀、及ぶ手あらわ
えへ急に死んで是るやうにての後のおも

看取志の
評格列
きる

と化す
胸腹を
擇ひたす
る評ひ亦
物の妙々

そりそり群賊のそれ生虜みゆき又逃れ
こゝよりかまひてあへ難きあくさうとひまうと
あへてぬ越十方を縋りきくゑひよめくこれ
とよき 珠まく

姑廟殿正坐對面の股を執庵を許のと文

仰ゆくゆるるる

かまひ路の也體え又七町餘の支度をす
そくの支度をす

三十四回 降えが向続して 降城が死と憤りしも
又小城の白ぬせんすをめづらす 蔵主の形勢
ましまさま 紛糾まとま 宅え

佳評

佳評

公九の兵船はれ船頭とて 廣
場にかゝりて 一役をつみしと 二内側のと
きをめそおり と 又舟とて 違ひ車

纖才十石とて 廓の舟

小紋二ヶ 佛軍の小隊ほの蕭条が宋江と
教りしと 役まつづり似て と 甚西大
事臺と と 事

と黒子とて 以ての舟心をめし

公羊傳曰近刑人則
輕死之道也君子不
近刑人

水所の蕭条
とむすひ今
ゆうぢう
東臺と
とすねん

第二回 が 降えが 乃
め地と うへて 正直に 寄訴の 余瀬を あわせ
てまことに あたし 朝霞を か まわしてま
あまおこ まつまつ 刃のみ さりと ま
階えと 捕、 繊縫の 帷幕の 誓い そ あねる
ひそひそ 伝て 併せ
三十五回 鮎舟が 繊縫と 捕んとて 降えが

前二節
降天と呼傳の隆元
西遷へ赴く

陸え捕つて角皮を
其の方檜とし城
をめぐるに一月
てもぬ又高麗へ
枝をもつてゐる

尚書曰天作孽猶可違自作孽不可追

隆光捕時有皮御之方極誠

改の勢ひもあらず

是よりて一派の骨肉つゝ

てもぬし又肩三面

と腰、

投きありま

多えぬく

翁本と枝原弓羽

争えぬく

也

東三丁ウ五引メ隅穀刺毛とすうり

氣柱毛と迷字

多えぬく

也

多えぬく

也

刀詔りて刻毛ひ

也

小紋二ヶ門毛と毛劍

千劍村へかみ

て作の用毛を

漢書曰洗垢求
六般虧

寫畫の筆柿が云々の又う例とある
「ありうて感服」と、又も絶々と小袖若小指と
称さる事、新考絵法叶ひてあらうし
嘆嘆多生詠と詠むて金珠と花粉と
佳評

又年金と辛吉様サニチヨウ
小飯コシヒカリをもとます
おちこぬひのあみやくもとよび
も絶カタマリがりゆのく縁エゾ縁エゾ
桙カキのさうのあむ
銀子

の腰の十す やづの歌者の忘刀あ
羣事も解をわらうて云ふのみで、もはゞ極ま
めうきくわね 猪の が、絆、對引の文も
文を弄ふ者 官をもつてお
あそびむかひあつてお
うそもあつてお

而も多事
勵健の如き
富士山の

造化の賞罰緩急の文も宏論り
あてて又もてて雷に従へる事アリ

世の急難アリ

佳評

就安が隣生捕とまの龍虎生る
に人を被り班を飾り小人の情も絶え
りて似たる自評トカク評も及ばず

佳評

才十二丁ウセ引メの念珠ハモ急躁セアリベ
シ歌者ノ語

佳評

觀音ヶ筋織と詠して前立と放免也

此れ久作の名りする所アリトヨリ詠シテ
てあると云ふ事御ゆき詠れどもゆの
仰意ああアリ

三十五回丸生が正直のお達ニ應じた
ぬまく都へ往迎トテ招引切と會うト叶
ヒのあつてゆづりアリ 正直が引狀も其實

文選曰貞幾妻子
輕富貴他人重

佳評

鴻家が時の格物めでたすめ さもあり
人情より詠きたる所

佳評

春あり一派みて又妖修をかくもゆ

汗一ノ
を佳

後市垣良守が舞お終えのうと告うて
の形勢もせり——仲間のうちかく度
那が介置人の事とりてあはれとぞ
ぬめり妙と云ふ

此書非重陽の日、本多を知る仙湖
まゆと字す。ゆゑて垣良守墓
と名す。是の事もあつて

嬰云幽冥のあはれハ九の花、あはれ
對張く候る事ありと雖も、まよへて
うめりゆきしてゆめ

ある。又形勢もうめくと云ふ
此書非良守の對面のものと云ふ
うめりゆきしてゆめ

オカセトウ九引ノ對面のうめりゆきと
附す。是又歌ある語刀也

三十七回此書の歌、あはれ、長き對面を
ある。梅氏の英風に裏へ歌ひあはれ同
の歎歌の文白と新詩にて、ゆ中のめ
うめりゆきしてゆめ

うめりゆきしてゆめ

あはれ著者
音と對面の
段と反對の
反對の筆
未よきうもて

安同との書
と反対の筆
の前半
辨せり

心既諳のやう

云是小御所
薦於院を
乞今のう
これをあ穿
整工修了
往と此よき
事はうじま
えられある
事あてまつ
タリ

嬰云が始度形に近着へとす時忽々と
麻疹て脣舌に生ず形勢ハ水滸後房の
彦濟御近が最難の國主を害して其間と
ちり高後宮のんとす時忽々昏倒
やまと似れども却々未だありあ
くひ意と云ふ 附註

始度形あ身と云甚のうの感風寒也
て致るまこと宏論妙中の又ゆくと云

謂く 骨肉熟透して健半と云ふ

又あ良情思の形容 例へスム一毛

き湯毎仰く及りんや少希の苦心

之言に坐中の肝丈之感服

始度形が太史令傳裏のとびてあらわせ

毛被例の事あらわせとめど

ゆか而と云非人若くあらずと云ふ
のうて五集あらわしむるもとくと云ふ
けらざつと云ひの起つてを遺物の
事あり

垣衣ノ投織の術と授りて身のす

高評精妙
立ち立り
立る立る

とやく年 新工房 勝文め
蕃勝がおゆうをすく、客に販賣せと
賣ひ立派ありとあほと同音の文句別
てもかく此度眼の容貌の又四集
うらえと御もどり新工房でま後の
事あるまい。要は化自由のみ併めや
のみうて再び熟達のかゆする。又持ふ
蕃勝をかねての修業例の事ある
とく説き立派の

三十八回時永が蕃勝が名漏と算て至る是
せぬ故唐歌り急急と詞を綴り父
詠歌人仲々めくらめくう又愛み
甘き云々の文一まとてあれとめく

持ふか河内に赴く時自負して業手とひら
ひるをの王濱が詮々對て自負する
思ひやまく日父の病と傷りて忌憚と
隣りにあまくあまくあまくて修業と
ううまく一派とつづけ。能者の用心珍重と
是則船出と
多愁の黒音
所に

佳評

佳評

毛回本集
第一の廻目
うと解んと
毛子文也
列記篇まで
毛子文也

秦湯がふと想ひと掌根
経の情態あるや
持ふ事あらが至る
對ひておもひりてま
眼鏡をさへ手を歟
ぬきの入はるる
此度娘抱きと見ゆる
あへの心
頻り形跡見えぬ
夫アオセリメ浮れてその假名とうと
聞えず詰める

おふくろの家鏡と之を絶句
心事
圓

三十日也がおふく事も略と
おはせの事も略と
おはせの事も略と
おはせの事も略と
おはせの事も略と

遠慮のより
京都去河内
をもて
北山が玄蕃と対也

史記曰君子淡以
親少人甘以絕
あけ方ハ本
集年四回の
題目の序
ウヘ

高評
ちきく

恒名の爲めに轉りハ石以丘花が素翁が心
御鑿津元
被毛者
墨を口にせ
事

將ひも爲めに轉りハ石以丘花が素翁が心
中と是後もとそひゆくも起るに異う
て仰るの用い感心

豪爽表がお次とて始度娘の傳を省し
はおほよめ持が場内松倉と五郎
と義通の伝をもととお似
きとも意味と別りてをめこ

自作が稿を冒ふとて其丈もとの稿端

始度娘莫主の附り津林風もとて云
教訓の文作例の事もとをめりかき
くまの即天丸莫主情薦の形勢もと
めくらめくねぬのあし

始度娘がお母の穀音と寧て毛様

活人草と叫たゞく轉りハ計里ハ
争三集り陽あが石と轉ふつれて惟えと計
りてあるてかく似てもむの是もととす

此の考もめりて感服のあみ
又殊危をさうの云ふの文ニ

史記曰先則制人
後則為人所制

便見體
起居の事
舞を以れ
列を以れ
きりつて
そをきり

工江てめく丸仰あらわす

而あり風

おゆが後事と此處の轉ふを様尊

隨意破身を夢見し又死後再生せしも

とあらずて身たまひあつてまう風

四十回死後再び枉乱して人に迷惑

と倒れて様の所を黒毛へ工丸をめ

仰きとつづ

首二尋長脚が不料に金刀の也と見

めこ毛ぬが名号の絵畫了。春心渺邈と

二高と轉ふの油々引けのるゝと云ひ

よりの渾てこゝの工丸例のとある碑文

めく

三評

三の小説序
の屋敷院
古井と手す
まほのとく
妙

家玄が持ゆる名号とある。毛毛と審考
やうい水滸後編の屋敷院が其清り高茶
とすめの良女と強てありやうとか。仰る如
あはと仰るは某ありつててよみく又長毛と
幻湖りてほむ。新章のみ考とつづ

感觸

臣範曰事不愼者
敗之道也

佳

佳評

佳

もはば
前知の駄
目と照應

就座がおひれを計とさる。後ごろの
物ものの宝たからと後ごろの身み
に附ついまと身みの身みと身み
振ふ衣きの身みと身みの身みと身み
詳くわりちべと身みと身みの身みと身み
手て、ゆいの身みと身みと身みと身み
身みと身みと身みと身みと身み
身みと身みと身みと身みと身み

一 日 千 秋

も安あら
ひれの壁
の腹稿も
ひがみよき
音官遠感
まへる事
嘆息すむ
ものに音機
羣玉堂の
韻書をとほ
え

文保六年乙未六月十九夜

ニ更終下

墨翠 墓稿

いとあらうとまき事あら 桂窓ふうハ太行九疑
洋々あらて因ふまくと畫眉へ 且と向かま
仰や草書うそそく 章法皆ゆ やふあめり
別々とかく書まし事あらん又は、考證の
先もの出若の段又は、考の要、さまく、ねえ
ゆる通例しませんと、考め又と、四字、場所を
教多アラムラカ清風こづくま 汗氣もよぎ
ふぞけまく、毫毛もまんじか一、遠感、なまく、ゆく
依て和と廟と、まろり仰ぐわ牛もとお達
もあはぬ例うしゆか事もとこころ、あく

昌黎

荷作山室先生

足利下

のまつまつとこゝりくみえりへけれども唐山の俗語小説の大筆者へ
必法則あるとの間の或作者がこれをもつとましく看官等に不及
きる拙作り被法則は故なりヨリナ抑併の法則へ

主客 二より伏線 三より照應 四より返戻 五より襯深 六より複合

大約毎回の人物は主客あり譬言の能手のシテ「キの如く看官
先づこの主客を辨明せられ作者の用意を知るとかうる譬言
本集第二十一回の荷二郎即長船の主ゆ木免六及藤松鈍梅
皆の客を餘る事無くへてあるべ

又伏線の後は新奇の趣向をふえるるるより以前のチコトアリ莫た
ひあくこ壁書の後は荷二郎の隆光と階と趣向のよう花落の旅
宿の段は荷二郎の長船子隆光のむすびとこれも亦二の町敵て思

やきの火則伏線也又ハ九のせ社院ヤ一姑蘇非の重宝失失の
既よ姑蘇非袖裏よとあてひそひ金てあくをも返すアサ
核かづははよおつてヨリモよ返るてあんどうじいに落よ氣安持
永よヨリカの梅氏の重宝て納采ヨリモ伏源こみの伏線
まくあり既ち心とひそひをあらう分明うん枚草々直進すよ

きと又照應の律詩と對向せじる如く彼と此と趋向と對を書
きり序言の本編第一集ハ六つ夢ヨ又義隆の首級を乞願ひ從
董大の暗夜と照らすゆりかとひが二集姑蘇非復難言
段ヨ全圖モ董大將のゆり見之則照應ヤと彼と此と對を
取シテ又ニモ正對とも思ヒ以董大將も再び之

又本集ヨ姑蘇非の與同様ノ裝を容れて自身替りモ西徒を

歌く趣向ハ分三集ヨ謫を水の姑蘇の歌人ヒシカセモ籍子若
ヒアリ置よと反對ニ初ハ石をくぼるノ様されり想ひせれ
ヒモの物同一がよ故ニこれらと反對と云ふ事ゆ此の段の
笑辞ヨ謫を石を輕す入れて維持を計リスと仰く似
よ在すも主と宣ハセハされうる照應反對の事ヒト云ふ事
多た故れ仰古の用意と題無しめどて是より唐山名人の
釋坐やかゝる勢ヨヨリ行りよきひもとて居りニスをあひて
愚説の深ヨリと考へる所であるシ

又重複ハ只行もする作未認ヒ前後もむすりすがるもと
かくひおもせんほもなほされす水詩は西北紀ニ重複ニニケル
ある重複と照應の例ヨリナラキ重複ハ作未の譯

えりはすも足下を照らし作さる故意併す趣向あれど
乞同一かと見眼の者官一目されし分別するに難いとぞ
吉富今之和心もよみがえて知りて作りあつてゐる

又襯除り趣向の下深く金聖歎歎水滸の序説より
とあつたうすみの襯除と併せやうれと襯除の下
あるまく伏線ハ墨寺そくくわたりされりむ別に多く
辰山の御史さんと云つてゐるがあれ共に但子諱一契て
便りきし昌黎の都をこれぬ而すよもく解ひむ和源玉之
忍れまし心同好ニキ惜まし致り也

○校本集作者第一の題目へ特永主僕う千里鏡の跋す
石け愁のあをこじて前ふ補正直ち庭中の山う千里鏡

ハ九の笠屋

○もも限てりあり是則後回持永主僕う千里鏡の跋除
元植限伏線と異むかうされらあく墨を合ふるへくに
抑持水、始摩、姬と春意の般へ作ちん難、そのゆゑ
あままで笠に名言^{名言}十二梅後集の趣向と本づく千里鏡と
さくかわが三出でれとも新う冬月かく家内壁にむか折
まれてちよと又とがとうくハ九の笠屋の旗拂の日と持
參うぬと始摩、非と見るどひを向ひて是とこの旗拂
の段を亡見兵士在せめ日稿本と枝園、せ折り
底賤のうとやうへんひに弊をま洋らうタリセみにこうへん
てふ思ひまうへやむ畏思評おどりきゆと坐る第一の
國目とえ連一のうへん遠憾ウシカセモのゆふうも評

手にまことに先前書の意とくつり初稿の上に思評
を多く精細の高評あり極論のえを増むてな過ぎ
りやんがる入へても従じぬ毛もぬとひやうて及ぶ
ひきまかでゆく且被言はせぐれへ思者の難直
き一ノアリのりんの所容とねじひもつてひがねく進
みるに序文を佳妙やうとヨシく感佩せむも後
述くからひ進或より錦の上よりたて添はば思評
のをれりんとくのくらを天子足方とひと同様に
稀に同妙知音がま頃よりをかねてうみて珍ら
ユ及ばずこれね老々人の癖とゆること
ひまよと婚ニ拂ひ身を立たせ著化堂老翁放哉



